

森万紀子

あしおと

足立母



森万紀子

足立

福武書店



森万紀子（もり・まさこ）

一九三四年、山形県に生まれる。

本名松浦榮子。五三年、山形県立

酒田東高校卒業。六五年、文藝界

新人賞に応募した『草独者』が佳

作となり文壇にデビュー。八〇

年、『雪女』（新潮社）で泉鏡花文学

賞を受賞。著書に『黄色い娼婦』

（文藝春秋）『密約』（新潮社）『運

河のある町』（講談社）などがある。

発音（あしおと）

一九八八年二月一〇日 第一刷印刷

一九八八年二月一五日 第二刷発行

定価二二〇〇円

著者 森 万紀子

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二一三一二八

千一三 電話〇三二二〇二二二

振替口座（東京）六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

目次

海岸の舞台で

5

内空に行く

61

跫音

115

装
幀
司
修

楚
音

海岸の舞台で

曇天の日、外苑に闇が降りてくるのは意外に早い。

律子が自分のアパートから地下鉄のA駅を通り、繁みの濃い街路樹の下を通り抜け、外苑に入った時には、夜七時半だというのに、深夜を思わせる暗さだった。

木々の下に身を寄せ合う人々も今夜はほとんどいない。

もう夏の始まりというのに、長い間、梅雨に閉じ込められた束の間の晴れ間では薄ら寒く、散策に出て来る人々はいないのかも知れない。

律子は更に外苑のグラウンドや競技場の側を通り何本もの舗装道路を渡って、いつものかなり広い暗がりが募る草原くさはらに出た。

そして、ゆっくり泳ぐようにその真中に向って進んで行った。

やはり人は誰もいない。

通過する風は速力を伴い、強く頬を打つ。風の切れ目に、律子は地面に大判のハンカチを敷き、ゆっくり腰を下ろした。

急に地上から地下から潮騒のようなざわめきが、体に纏わりついてきて、その一音一音の内部の引力に引かれるように、律子の体の中も揺れ動く。

草原の暗がりの向うの大通りにはヘッドライトが絶え間なく流れていて、電光のきらめきが目を刺してくる。

外苑を曲がりくねって伸びる舗道には、歩いている人も通過する自転車の灯も、見えな

い。ただ、律子が坐るこの暗がりの空間を隔て、舗道にライトを消し車体を暗さに沈めたバトカーが、獲物を狙う獣のように潜み、周囲をうかがっていた。

律子は落胆した。

バトカーや警官がこちらに関心を向けていると思うたび、自分の過去の男達、自分に舞台から降ろされ見物人にされたあの男達が警官に仕掛けた自分への悪意を感じるからだろうか。

やはり今もバトカーはゆっくり車体を律子に向けて廻すと、道を塞ぐ格好になりながら律子と向い合った。

やがて急に点灯されたヘッドライトは、律子の全身を浮かび上がらせた。

素知らぬ顔で律子はライトの先の闇を見続けた。

長い髪を風が吹き上げてくる。

不意にヘッドライトが消えたと思うと、車を降りた警官が律子を目指して草原くさはらの中に入つて来た。

「……そんな所で何をしている」

警官は途中で止まり手招きし、そしてまた尋ねた。

「……本当にそんな所で何をしてるんだ」

「……男を待ってるのよ」

律子は坐ったまま風に声を送った。

「男?……」

警官は動かない律子の所まで、とうとう歩いて来た。

「こんな暗いがらんとした所に、男が来るはずないだろう。君、場所を間違えてるよ。もつと人が通る、あっちだろう」

警官は駅に近い、いつもは散策する人々の多い方向を指差した。

「向うじゃあないわ。私はいつも此処よ」

律子は風がもたらす闇のうねりを受けながら答えた。

今も、地上から地下から、あの潮騒が纏わりついてくるのを全身で感じながら、私は此処と繰り返す。

いつもは夜明け前に一人、この闇の空間に身を沈めて来ているのも、潮騒に身を晒していたかったからだと思う。

「じゃあ、君が待っているというその男、本当にこんな所に来るのかな」

警官は律子の前に屈みながら言った。

「わからない。だから賭けてるの。今、何時ですか？」

腕時計を見ようとする警官の姿の向うに、一週間前、あの萱という肥った三十過ぎの男に渡した、彼と出会った街路樹の下からこの場所までの地図の風景が広がっていた。

萱と会ったのは今はヘッドライトの交錯で光の川となっている大通りが、光流が切断される一刻、都心の日常の時間と時間の切れ目に生じる夜明けの静寂の中であつた。

現実の時間の谷底のようなその道の静けさの中を、いつものように律子は鬱蒼とした街路樹を見上げながら外苑を目指して走っていた。

どこまでも見通しがきく樹々の下の中ほどの所まで来た時、前方にずんぐりした男が暗

い空に向って何度も跳び上がっているのが見えてきた。

律子が側をすり抜けようとスピードをあげると、男はいきなり街路樹の下から舗道に躍り出て来て、両手を広げた。

「こんな時刻に一人で走っていると、僕のような酔払いに捕まりますよ」

薄闇の中でも無精髭を生やした男の顔は、アルコールの酔いの緩さはなく、酒酔いでないことが解る。

「何に酔っていますの。幸せにですか」

あの跳び上がり方は異常だったと思いつながら、律子は聞いた。

「あなた、よく解るんだなあ。僕は本当に幸せに酔ってるんですよ。三年半も病んだ狂妻とやっと離婚できたんです。今日、自由の身になったんですよ。この地域にある病院に僕は三年半、子供を連れて会社と往復し続けたんですからね。あの地獄の生活から解放されたのでもう、万々歳なんだ」

彼が両手を空に向って上げるたび、首に掛けていた千羽鶴が揺れた。

「……これですか」

男は律子が見つめているのに気づいて、千羽鶴を自分の首から外すと、いきなり律子の

首に掛けてきた。

「……似合いますよ。あなたに、とっても似合う。貰ってくださいよ」

「……要らない……」

返そうとすると、男は急に哀願するように、貰ってください、頼みます、と言う。

「これは、女房の身内や友人、知人達が、女房のために作ったんですよ。全治しないと何度言っても、治るように祈る自分達皆の願いを託したものだからと、押しつけてきたんです」

「でも、そういう人達の祈りは私には関係ないですし、他人の必死の祈願を首に掛けていたら、重くって、首が折れてしまいそうですもの」

男は一瞬でも、千羽鶴が自分の首から離れて気が軽くなったのか、嬉しそうに無人の周囲を眺めながら言った。

「あなたには関係ない人々だからいいんじゃないですか。僕はその一人一人の声も、顔も生活まですっかり知っているものですから、捨てるに捨てられないんですよ」

風が揺する街路樹の葉音と一緒に、男の言葉は路上に舞い続けた。

「病院へ通っている三年半の間、生き地獄から逃げるように僕は今の時刻、よくこの街路

樹の下を彷徨っていたんです。唯一の自分自身になれる時間でしたからね」

「じゃあ、この通りで何度か私とすれ違っていたのかも知れませんか」

夜明け寸前の時刻は車も人も通らない。しかし律子は走行を続ける自分の視界に、ずっとくりしたこの男が、二、三回浮かび上がったような気がしてならない。

「確かに僕達は出会っているはずですよ。すれ違っているか、遠くを横切っているかでしょう。でもそれが、僕が自由になった今日、こうしてはつきり出会えて、そのことを確認し合えるんですからね」

男は萱という自分の名を告げながら、律子に握手を求めてきた。

「本当に僕は、自由になったんです。千羽鶴の人達の僕への非難はこれから本格的になるのですが、非情だ、許せない、何を言われたって、この解放の喜びに優るものはないんです」

二人の間に風が何度も吹き抜けた時、萱は自分の饒舌に気がついたのか、律子の肩を叩いて笑った。

「ごめんなさい。ついもう今の身が嬉しくって嬉しくって」

彼の声は明るく上ずっていた。

「僕はもうじつとしていられないぐらい幸せですのでね、五歳の息子を連れてH海岸へ、思いつき英気を養いに行くつもりでいるんです。水平線を見ながら、これからは自分のため、自分自身に成るためにだけ生きようと、決心してくるつもりなんですよ」

彼の声は再び街路樹の葉を揺らした。

貰うことになったのか、三重に巻いた千羽鶴を首に掛けると、確かにさらさらした紙の感触が心地良かった。

「今、あなた、向うに走って行こうとしていましたね。どこへ行こうとしてたのです？僕も一緒に行ってみたいなあ」

萱は律子が走っていた前方を背伸びをしながら眺めていた。

あれはひたすら、ビル街の夕暮れから、人波の雑踏から、きらびやかなショッピングから、幸せを吸収しながら、自分の内部の至福の海の命に走り還るように、外苑の闇の空間、潮騒が纏わりついてくるあの空間を目指し、走行を続けていたのだと思う。

「ね、あなたが走って行こうとしていた場所へ僕も行きたいね。送って行きながら一緒に行きたいなあ」

「……今度、今度にしましょうよ」